

接尾語小考(一)

江崎 郁夫

はじめに

この小論では、言語過程説の立場から詞辭の峻別をなされ、接尾語を詞に帰属なされた時枝誠記氏の接尾語論を中心に、氏の接尾語論が適切か否かを一語としての機能の有無という観点から検討し、併せて用言的接尾語にも触れてみたいと思う。

I

時枝氏は『日本文法口語篇』の中で、

1. 私に何か云いたげにしていた。^{注1}

2. 地に届きそうな様子です。

3. あなたにほめられたさにそんな事をするのです。

右の三例をあげられ、日本語の接尾語を、単に或る品詞性を附与するものではなく接尾語自体が或る概念を有し、また、語としての機能を持つものであると規定されている。日本語の接尾語を一語の機能を持つものとされた氏の説は傾聴に値するが、一語としての機能を氏のあげられたすべての接尾語が持っていると考えるのは疑問を感じる。はじめに右の用例の1・2から検討を加えることにする。1・2の例は次のような入子型構造で示すことができる。

何か云いたげ

^{注2}

地に届きそう

右の二例に関しては、氏の言われる如く、「げ」「そう」が、それぞれ「云いたげ」「届きそう」で一語を

構成しているとみるより、むしろ「私に何か云いた」

「地に届き」全体についたものと認められる。そして

右の二例は氏の接尾語論を進めていく上に最適の用例

であることを知り得る。しかし、ここで問題にしなければならぬのは、右の二例とも動詞の連用形に「た

＋さ」「そう」が接続しているという点である。「げ」

や「そう」は一般に

「げ」 大人げ 退屈げ 哀れげ 愉快げ 楽しげ

「そう」 高そう 深そう 楽しそう 悲しそう

悲しげ 寂しげ 苦しげ

注³ 体言或は準体言に接する。今、試みに「げ」「そう」

が動詞連用形に接する場合と準体言に接する場合とを

比較検討してみることにする。

○動詞連用形に接する例

a 太郎は次郎にいわくありげに話す。

b スカートのすそが地に届きそうだ。

○準体言に接する例

c 太郎は次郎に楽しげに話す。

d スカートのすそが寒そうに揺れる。

右の用例を a・c、b・d との比較の上で検討してい

くことにする。

注 4

a 太郎は次郎にいわくありげに話す。

c 太郎は次郎に楽しげに話す。

a の例では、最初に「いわく」と「あり」とが主語述

語の関係にたつた後に、「いわくあり」全体を「げ」

がうけており、時枝氏の言われる如く一語の機能を持

っているとみられる例である。それに対し、c の例で

は「げ」は「楽し」しかうけず、「楽し」と「げ」で

一語を構成した後にはじめて、下の「話す」と連用修

飾・被修飾の関係にたち、その後、上の語との修飾・

被修飾の関係にたっている。

次に、b・d の例は次のような文構造で表わすこと

ができる。

b スカートのすそが地に届きそうだ。

d スカートのすそが寒そうに揺れる。

b の例は「地に」と「届き」が連用修飾・被修飾の関係にたち、更に「スカートのすそが」が「地に届き」と関係した後に、「スカートのすそが地に届き」全体を「そう」がうけている。それに対して、d の例は、まず、所謂形容詞語幹「寒」と「そう」で一語を構成した後、「寒そう」は下の「揺れる」と連用修飾・被修飾の関係にたっている。b・d に右のような差が生ずるのは、b の例は「スカートのすそが」「地に」のいずれもが意味的に動詞連用形の「届き」にかかっているのに対し、d の例では「スカートのすそが」は「寒そう」という語を超えて「揺れる」を直接修飾しているからである。いま、両者の相違を図示すると次のようになる。

b スカートのすそが地に届きそうだ。

d スカートのすそが寒そうに揺れる。

次に、a の例のように、動詞連用形に「げ」のつきた例は、

いわくありげ 事ありげ

事情ありげ 由ありげ

常に動詞「あり」には「あり」に対する主語が要求されるという点が重要である。それに対し、体言・準体言に「げ」の接した例は、

退屈げな様子 楽しげな様子

のように、上に修飾語を必要とせず単独で用いられる。動詞連用形に「げ」の接した例は常に「あり」の前に「あり」の主語に相当するものが存在しないと使われないということは、動詞連用形と下の接尾語「げ」の結合度より前の名詞との結合度の方が強く、「いわくあり」「事あり」で以て複合語になったものに「げ」

が接したものと考える方が穩当であり、この「げ」を以て一語としての機能が有るとするには、あまりに特殊な例ではあるまいか。「げ」は先にも見たとおり、一般には体言或いは準体言に接する。「げ」が動詞連用形に接するのは、

いわくありげ　事ありげ

のように、動詞「あり」に接するのを常としており、または、

行き^たげ　知り^たげ　書き^たげ

のように、動詞と「げ」の間に「たい」の語幹「た」を必要とする場合である。「げ」そのものには、語としての機能を持つものは見あたらないが、

体の一部分が悪いなんて不思議千万だと言いた^げ。
な　(川端康成・禽獸)

私は少しためらいながら、入っていいかと問いた^げに長椅子へ近づいてみますと　(同右)

動詞連用形に「たげ」の接した例は、時枝氏の言われる如く、上の語句をうけている。これは「げ」よりも

「たい」に語としての機能が有るのではなからうか。
すなわち「たい」には、

水を飲みたい。
学校へ行きたい。

右に見る如く、語としての機能がある。先に時枝氏が「げ」に語としての機能があるとした1の用例も、「げ」に一語としての機能があるのではなく、「た+げ」の形で結合してはじめて語としての機能があると修正されねばなるまい。すなわち1の例は、

何か云いたげ

という入子型構造で示されるのではなく、

何か云いたげ

という入子型構造で示されるべきであろう。

以上述べてきたように、「げ」そのものに一語としての機能があるという時枝氏の説は特殊な例にのみ現われる現象であり、そのまま認めることはできない。

「げ」「そう」の他に、氏が一語の機能を持つとされた

3. あなたにほめられたさ

の例も、「た+げ」と同様、「さ」に一語としての機能があるのではなく、「た+さ」に一語としての機能があるとみた方が良い例である。また、

あの人によさ

のように、一音節の形容詞語幹に「さ」の接したものを、

あの人によさ

右のような入子型構造に入れて考えるのが適當であろうか。「ヨ」という音を聞くことにより、その概念を正しく把握することができようか。「あの人によ」に「さ」が接したというようなことは、觀察の立場にたつた場合にはじめて言えることで、言語を主体的立場にたつてみる場合には言えないことであろう。すなわち、「ヨサ」という音を聴くことにより、はじめて「良さ」という概念を把握できるものである。結局、「あの人によさ」は、

あの人によさ

という入子型構造で示されるべきであろう。

「たのし」「うつくし」等の三音節・四音節の所謂形容詞シク活用語幹の場合は独立性も強く、そのみでその概念を理解できるように思われるが、現代語に於いては、「たのし」「うつくし」という語幹のみで具體的言語作品に現われることはなく、また、

日々のたのし
彼女のうつくし

右のような修飾・被修飾の関係はなく、「たのし」「うつくし」に「さ」あるいは他の接尾語の接した形でしか修飾関係が成立しないのをみてもわかるとおり、これらは「たのしさ」「かなしさ」で以てはじめて語としての機能を充たしている。このことは「深」「高」等の形容詞ク活用語幹の場合には、接尾語「さ」「そ」等がつかねばその表わす概念を的確に把握できず、語としての機能を持たない点からも明らかである。

以上みてきたように、接尾語が一語としての機能を持つと考えられるのは、動詞連用形に、所謂接尾語の接した例で、接尾語に上接する語が上の語句の被修飾

語に立ち得、意味的に上の語がその語を修飾する場合にのみ限られるとみた方が適當であり、接尾語は、体言或は準体言に接する語としての機能を持たない単語内部の構成要素であると規定することができよう。

II

時枝氏は用言的接尾語として『日本文法口語篇』の中に二十例をあげられている。その例を接続の面から分類すると次のようになる。

1. 体言に接するもの。

がる がましい じみる だつ づく

なす ばむ ぶる めく らしい

2. 準体言に接するもの。

がる 入(い) めく

3. 動詞未然形に接するもの。

させる れる られる

4. 動詞連用形に接するもの。

がたい きる だす たい たがる つける

右の1~4に属する語の分類を手元の辞書で調べると次のようになる

	がる	(し)い	させる	れる	られる	がたい	きる	だす	たがる	たい	つける	がましい	じみる	だつ	づく	なす	ばむ	ぶる	めく	らしい
A	接	接	助	助	助	形	動	動	接	助	動	接	接	接	接	接	接	接	接	接
B	接	接	助・接	助・接	助・接	接	補	補	接	助・接	接	接	接	接	接	接	接	接	接	接
C	接	接	助	助	助	形	動	動	接	助	動	接	接	接	接	接	接	接	接	接
D	接	接	助	助	助	形	補	補	接	助・接	補	補	補	接	接	接	接	接	接	接
E	接	接	助	助	助	助・接	補	補	接	助	補	補	接	接	接	接	接	接	接	接
F	接	接	助	助	助	助	動	動	接	助	動	動	接	接	接	接	接	接	接	接

形Ⅱ形容詞 造Ⅱ造語成分 接的Ⅱ接尾語的
接Ⅱ接尾語 助Ⅱ助動詞 補Ⅱ補助動詞 動Ⅱ動詞

A..広辞苑 B.新潮国語辞典 C.角川国語辞典
D.講談社国語辞典 E.明解国語辞典 F.岩波国語辞典

右にあげた辞書の分類には、その基となる文法観・編集上の相違等があるので、同一基準のもとに比較することはできないが、反面、此等の相違があるにもかかわらず、右にあげた例の中には、どの辞書でも接尾語という分類がなされていることに注目しなければならぬ。右にあげた六種の辞書で、すべて接尾語として扱われているものをあげると次のようになる。

がる がましい (じみる) (だつ)

(なす) ばむ めく らしい

そして、これらの例は興味あることに、先の接続面から分類を試みた際の1・2に属する語であるということである。それに対し、4にあげた例の中には「きる」「だす」「つける」のように専ら動詞・補助動詞として分類されているものがある。

はじめに、1・2と4(「たが」「たがる」は後述する)の相違を意味の上からみることにする。1・2の体言乃至準体言に接する語は、

悲しがる 押しつけがましい 老人じみる 殺気

だつ 山なす 大波 汗ばむ 学者ぶる 春めく
男らしい

いずれも状態・様子等の抽象的概念を基に持っている。それに対して、4の動詞連用形に接する例は、

食べきる 動きだす 行きつける

それぞれ完了・開始・習慣等の意味を持っており、上の動作を補助する機能を持っている。同様に、

行きがたい 理解しやすい

等の難易に関する語も、1・2に属する語が表わす状態・様子等の抽象的概念とは意を異にしている。また、1・2の体言・準体言に接する例は、語以前のものに語としての資格を与えるか(準体言に接する例)、または名詞を動詞・形容詞にと、その品詞を転成させている(体言に接する例)のに対し、4の動詞連用形に接する例は、品詞を転成させていず、前項の動詞に外部から意義を添えているにすぎない。但し、ここで問題になるのは、

行きがたい 理解しやすい

等の例である。右の例は、いずれも動詞を形容詞へと転成させている。そこで次の条件となるのが語としての機能の有無である。

a 母の死を悲しがる

b 星がきらめく

c ワイシャツが黄ばむ

右にあげた例は、いずれも一語としての機能を持つ語としてみるには不適当な例である。即ち、前の語句全体が時枝氏の言われる用言的接尾語を修飾しているのではなく、「悲し+がる」「きら+めく」「黄+ばむ」のように結合したものを上の語句が修飾しているのである。換言すれば「がる」「めく」等には、一語としての機能がなく、語の構成要素としての資格しかないのである。a、b、cの文構造をみると次のようになる。

a 母の死を悲しがる

b 星がきらめく

c ワイシャツが黄ばむ

右の文構造は時枝氏の言われる入子型構造に置きかえることはできず、次のような入子型構造に修正されねばなるまい。

a 母の死を悲しがる

b 星がきらめく

c ワイシャツが黄ばむ

このことは、4の「きる」「だす」等と比較すると明らかになる。

ごはんを食べきる

汽車が動きだす

「きる」や「だす」等、動詞連用形に接する例は、

A B

ごはんを食べる

ごはんを食べきる

汽車が動く

汽車が動きだす

右のように、「きる」や「だす」のつかない「ごはんを食べる」「汽車が動く」という表現が成立する。即ち、Aの表現も質的統一体をもった表現であり、さら

に「きる」や「だす」がAの表現の用言の意を外部から補助した表現なのである。故にこれらの語は一語としての機能を持つているのに対し、

C D

イ母の死を悲し 母の死を悲しがる

ロ星がきら 星がきらめく

ハワイシャツが黄 ワイシャツが黄ばむ

1・2の体言・準体言に接する語は、Cの形では質的統一体をもった言語表現とは成り得ていない。1の例では「母の死を悲し」と対格を示す「を」があるのは、その対格に対する語を下に要求していることに他ならない。即ち、

母の死を悲しがる

のように、直接は下の「がる」と関係し合っているのである。しかし、時枝氏の言われるように、「がる」が上の「母の死を悲し」全体をうけているとみることではできない。「悲し」のような所謂形容詞シク活用語幹の場合には文語的表現で「母の死が悲し」という言

語表現が可能を為、「がる」が外部から意味を補助しているようにみえるが、「母の死が悲しがる」という表現が成立しないのをみてもわかるとおり、「がる」は意義的には状態性を附与し、また外部からは動詞としての資格を与えているのである。ロ・ハの例では、このことが一層明瞭になる。即ち、ロ・ハもイと同様、文構造の直接の修飾関係をみると、「星」「ワイシャツ」はそれぞれ「めく」「ばむ」にかかつており、「星」きら「ワイシャツ」黄「黄ばむ」という関係にたっているものであり、「きら」と「めく」、「黄」と「ばむ」とに分けて考えることはできない。このようにイへの例は「がる」「めく」「ばむ」等が接して初めて質的統一体をもった表現になり得るものであり、これらの接しない形は言語表現とはなり得ない。このように常に上に限定する語がなければ語としての機能のないもの、換言すれば、それ自体では語としての機能のないものを接尾語としてとらえることにする。

それに対して、

ごはんを食べきる

汽車が動きだす

右のような4の動詞連用形に接する例は、それぞれ次のような入子型構造で示される。

ごはんを食べきる

汽車が動きだす

これらは次のような文構造にたっている。

ごはんを食べきる

汽車が動きだす

即ち、阪倉篤義氏の言われるように、「食べ」「動き」

の方に意味の具象性があつて、「ごはんを食べ」「汽車が動き」という修飾関係がまず成立し、それ全体をさらに「きる」「だす」が包摂する関係にあるからである。このように動詞連用形に接して、意味が抽象化し形式化したものを補助動詞としてとらえることにする。接尾語と補助動詞を

悲しがる 食べきる

という複合語の形で取り出した場合には、両者とも、

悲しがる

食べきる

右のような入子型構造で表わされるが、上の語句との修飾関係をみると、前者は

体言・準体言×接尾語

と、語としての機能を持つのは、接尾語が体言或いは準体言と接した後であるのに対し、後者の例は、

動詞連用形補助動詞

補助動詞自体で一語としての機能を持つ構造にたっているのである。

以上述べてきたことを中心に接尾語と補助動詞とを弁別する特徴的なものをあげると次のようになる。

接尾語

1. 体言・準体言に接するもの。
2. 状態・様子・性質等の抽象的概念を持つもの。
3. 原則として体言・準体言と結合して、はじめて上の語句の被修飾語となるもの。Ⅱ一語としての機能のないもの。

補助動詞

1. 動詞連用形に接するもの

2. 動作の完了・開始・習慣等の概念を持つもの。

3. 原則としてそれ自体が上の語句の被修飾語となるもの。」「一語としての機能のあるもの。

最後に「がたい」について考えてみることにする。

現代語の「がたい」が接尾語か、それとも補助形容詞であるかの論争は種々行われているが、^{注7}私はこの「がたい」を補助形容詞として扱いたいと思う。時枝氏は用言的接尾語の例として「がたい」しかあげられておられないが、

にくい づらい やすい

等、難易に関する語はいずれも同じ範疇に入れて考えてよいであろう。これらの語は、

あの人言うことは理解しがたい

あの人言うことは理解しやすい

接尾語と同様「理解し」と「がたい」「やすい」とが結合したあとでなければ上の語と関係しない例も多い

が、「がたい」「やすい」等の難易に属する語は補助動詞と同様動詞連用形にしか接しないこと、また、

想像にかたくな

言うはやすく、行はかたし

右のように、文語的表現ではあるが、自立語としての用法もあり、さらに

目標に到達しがたい

こういう人間の心に燃えていた理想ほど人の目につき難いものはない。

「^{ずる}狡いわ。そんなに一人で行きにくいもの。」

(小林秀雄 マキャベリについて)

のように、語としての機能を持つ例もあるので、これら難

易に属する語は補助形容詞として扱って差支えないであろう。

Ⅲ

時枝氏は言語過程説の立場から、概念過程を経るか

否かの表現性の相違により、助動詞を辞・接尾語を詞と峻別された。ここで問題になるのは橋本氏が結局、接尾語と助動詞の相違を程度の違いにすぎないとした所^{注8}謂使役・尊敬・受身等の助動詞（以下、諸語と呼ぶ）を時枝氏が接尾語の中に組み入れられたことである。助動詞が

主 述 辞

彼は行った。

の「た」のように、言語主体者の判断を表わすのに対し、諸語は、

主 述

彼は怪しまれる

述語に立ち得る点から氏の説は首肯できるが、しかしながら、先に接尾語の特徴として述べたように、接尾語は体言或いは準体言に接するものである。それに対し、諸語は専ら動詞未然形にしか接しない。また、接尾語は、

じみる 老人じみる

世帯じみる

づ く 活気づく 怖けづく 近づく
め く 都会めく 女めく きらめく
ほのめく

体言・準体言に接すると言っても、その接する語が限定されているのに対し、諸語は多くの動詞に接する。また、接尾語は原則として語としての機能がないのに対し、諸語は、

彼はどろぼうに財布を盗^{注9}まれた。

右にみるように、語としての機能を持つている。さらに諸語は辻村敏樹氏の言われるように語尾的性格を持つている^{注9}という点から考えて、接尾語とは一線を画した方が賢明であろう。両者には以上のような相違があること、また、諸語は金田^{注10}一京助氏や辻村氏が言われるように相（Genus）を表わしているので、ここでは辻村氏の使われている相語尾という名称を使いたいと思う。

次に所謂希望の助動詞「たい」について考えてみた

る。「たい」も諸語と同様、述語に成り得るという点で辞とは一線を画して考えることができる。

1. 彼は水を飲みたい

2. 彼は水が飲みたい

右の例をみてもわかるように、「たい」を含む「飲みたい」「は」、主語「彼」の述語にたつている。「たい」が述語にたち得るということは、助動詞が言語主体者の判断を表わすのに対し、「たい」は事柄に対する表現であり詞に属する語だということである。この「たす」も先にみた「がたす」「にくす」等の補助形容詞と同様、語の機能を持つ場合と持たない場合がある。即ち、1の例は、

彼は水を飲みたい

「たい」が語としての機能を持つ例であり、それに対し、2の例は、

彼は水が飲みたい

語としての機能がなく、「飲みたい」で以て形容詞と同じ働きをしている。「たい」はこのように補助形容詞的な用法と接尾語的な用法の両者がある。この「たい」は、専ら動詞連用形に接し、外部から意味を補助する機能を持つているのに対し、接尾語は専ら体言・準体言に接し、状態性を附与する語であるので、接尾語とは一線を画して考えた方が賢明であろう。^{注11}この「たい」の語幹に接尾語「がる」の接したものは、

本を読みたがる

のように語としての機能を持つが、これは「がる」に語としての機能が有るのではなく「たい」の語幹「た」と接尾語「がる」のついた「たがる」で以て語としての機能が有るのである。そして、その品詞的性格は後項によつて決定されるので、この「たがる」は接尾語として扱うことにする。

最後に「らしい」についてみることにする。

3. 小一時間経つと、旅芸人たちが出で立つらしい物

音が聞こえて来た。

4. 大島ではなくて甲府の話らしかった。

(以上 川端康成 伊豆の踊子)

5. その素振りは生娘きむすめの鈴子とちがつて、遙かに女らしくなまめいて、幽霊は歩き出しました。

(川端康成 慰霊歌)

3 の例は活用語の終止形に接した例、4・5 は体言に接した例である。しかしながら、この「らしい」については接続で以て画一的に分類することはできない。

即ち、3・4 の「らしい」は言語主体者の判断を表わしているのに対し、5 の例は属性に関する叙述を表わしているからである。3・4 が辞に属するのに対し、5 は詞に属するものであるゆえ、前者を助動詞・後者を接尾語と分けることができる。これを語としての機能という点からみると、

旅芸人たちが出立つらしい物音

甲府の話らしかった

3・4 の「らしい」はいずれも「旅芸人たちが出立つ」「甲府の話」という上の語句をうける一語としての機能を持つ助動詞であるのに対し、

遙かに女らしくなまめいて

5 の例は語としての機能を持たず、「女らしく」という複合語になつてはじめて他の語句との修飾関係にたち得る接尾語である。「らしい」が助動詞か接尾語かは、言語主体者の判断を表わしているか、属性に関する叙述であるか、また、語としての機能を持つか否かを一一の具体的言語作品によつて検討することが必要である。

終わりに

本稿では、語としての機能という点を中心に、時枝氏の接尾語論(用言的接尾語)についての私見を述べてきたが、まだ接尾語を一面からしかとらえておらず、今後さらに具体的言語作品にあたりつつ、他の品詞とのかかわり、接尾語の歴史的変遷等を考慮に入れつつ、

総合的に検討していききたいと思う。

注1 原文引用の際、歴史的仮名遣を現代仮名遣いに改めた。

注2 後述してあるように、この例は、何か云いた げという入子型構造で示されるべきであろう。

注3 山田孝雄氏の用語ではあるが、本稿では、所謂形容詞語幹・形容動詞語幹、「ほのめく」「きらめく」等の「ほの」「きら」等、語以前のものを用いた。

注4 このような構文観は、北原保雄氏の「助動詞の相互承接についての構文論的考察」(国語学83集所収)より影響をうけた。

注5 言語過程説に於いては、辞は言語主体者の認定に関するものであり、文の成分としては「スカートのすそが」「地に」ではなく、「スカートのすそ」「地」が「屈き」にかかる連用修飾語であると言わねばならぬが、前の文構造との都合上助詞

をつけた形で修飾関係を述べた。

注6 『語構成の研究』角川書店

注7 大野晋氏「日本語の古さ」(『講座現代国語学3』所収)

関 一雄氏「平安時代和文の用言的接尾語」(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』所収)

吉田金彦氏『現代語助動詞の史的研究』明治書院

村上英一氏「形容詞」(『続日本文法講座1』所収)

注8 『国語法研究』岩波書店

注9 『敬語の史的研究』東京堂出版

注10 『国語学入門改訂版』吉川弘文館

注11 氏は助動詞を相・時・法に分類している。
「たい」をどの品詞に属させるかは検討中である。

48ページ	38ページ	21ページ	16ページ	16ページ	14ページ	1ページ	訂正箇所
上13行	上13行	下10行	下18行	下7行	下4行	上7行	

新蘇ヤ	耶蘇會板	地に届きそう	たフリ	打ちなきぞ	ふそも	今は殆どの	誤
新蘇ヤ	耶蘇會板	地に届きそう	たフリ	打ちないきぞ	ふれきも	今は殆どの	正